

求敵必滅

輝く海軍記念日

新緑五月の日の  
人形浄瑠璃

新緑五月の日の



文楽蔵 松崎

決戰下 / 五月郷土藝術

人形浄瑠璃 晝夜二部興行

太夫・三味線・人形總出演

(晝の部)

碁太平記白石噺

閉幕 閉幕 幕間

浅草雷門の  
吉原揚屋の

二、〇〇一 二、四〇  
二、四〇一 一、三五

御所櫻堀川夜討

辨慶上使の

一、四五一 二、三五

大阪地方海軍人事部指導  
西亭謹作並作曲  
大塚克三舞臺裝置  
村田芳生舞臺照明

水漬

二、四五一 三、二五

新版歌祭文

野崎村の

三、三五一 四、二〇

(夜の部)

新作紅葉狩  
紫紅山人原作  
鶴澤重造作曲

五、〇〇一 五、三〇

伊賀越道中双六

新關のののの  
岡崎のののの

五、四〇一 六、〇〇  
六、〇〇一 六、〇五  
六、〇五一 八、〇五

おしゆん  
傳兵衛  
近頃河原の達引

堀川猿廻しの段

八、一〇一 九、一〇

昭和十八年五月一日初日  
初日晝十一時・夜四時  
毎日晝十二時・夜五時 二部開演

・御觀覽料・

晝の部

一等 席 二圓五十錢  
二等 席 一圓三十錢上り  
三等 席 一圓二十錢  
夜の部  
一等 席 三圓五十錢  
二等 席 二圓三十錢上り  
三等 席 一圓二十錢  
(各等入場税別)

夜の部

一等 席 三圓五十錢  
二等 席 二圓三十錢上り  
三等 席 一圓二十錢  
初日各等約二割引  
(各等入場税別)

一等御座席  
二等椅子席  
前賣切符發賣致し居ます

は五日前より

前賣切符發賣致し居ます

前賣切符專用電話

南<sup>76</sup>四七壹壹番  
一般御用の電話

南<sup>76</sup>三〇三二番  
南<sup>76</sup>三七八八番



白もふし  
うすば  
④

【書 の 部】

碁<sup>こ</sup>太<sup>たい</sup>平<sup>へい</sup>記<sup>き</sup>白<sup>しろ</sup>石<sup>いし</sup>噺<sup>ばなし</sup>

浅 草 雷 門 の 段

吉 原 揚 屋 の 段

浅 草 雷 門 の 段

人 形 役 割

口  
豊鶴豊  
澤竹澤竹  
團千叶富  
伊駒太太  
三夫郎夫  
奥  
竹本長尾太夫  
鶴澤清八

手品師 豆藏事  
どちよ  
大黒屋宗六  
桐竹政龜  
吉田玉徳

安永九年正月（二四四〇）から江戸外記座に上演された全十一段もの。作者は烏亭菴馬、紀上太郎、容楊齋の合作。筋は有名な宮城野、信夫の敵討を慶安太平記の世界に織り込み、二女が宇治常悦（由井正雪）、鞠が瀬秋夜（丸橋忠彌）等の後援の下に目出度く親の敵志賀臺七を討ち取ると云ふのを骨子としたもので、此度上場の場はその第六段目（江戸と田舎の姉妹は我身に賣らるゝ軍用の品玉）及び第七段目（通と野暮との客と客は意見しらるゝ曾我物語）に當り、共に焉馬が受持つて書いたもの。吉原の真中で田舎娘に思ひ切つて奥州訛を使はせた所がミソである。

尙この二女の敵討の實説は、松平陸奥守の家老片倉小

茶店亭主 吉田常次  
勘九郎 吉田玉市  
娘 おのぶ 桐竹紋司  
見物人 大ぜい

吉原揚屋の段

切竹本重太夫

豊澤廣助

人形役割

傾城宮城野 吉田光造  
女郎宮里 吉田龜夫  
女郎宮柴 吉田兵次  
禿しげり 桐竹小紋  
娘 おのぶ 桐竹紋司  
やおり手 吉田萬次郎  
大黒屋宗六 桐竹政龜

十郎の剣道の師範田邊志摩の供廻りを過つて破つた白石足立村の百姓四郎左衛門は無禮討になつた。時に享保二年（二三七七）の事である。四郎左衛門にはすみ（十一歳）たか（八歳）の二人の娘があつたが、これを無念に思ひ、陸奥守の剣道師範瀧本傳八郎の許に下女奉公をして六年間剣術を修業し、享保八年四月公儀の許を得て仙臺、白鳥明神の境内で父の復讐を遂げたと云ふ物語である。

梗概

大黒屋宗六が太鼓持ちの五町と來たのは豆藏のどぢやうが繪解きをいくさり濟まし一杯引掛けに行つた跡で、宗六は用足しに行つた五町を茶店で待つ事になる。と女衞の勘九郎が來て地廻りの番七と立話。石堂家お預りの御宸筆を探し出すと三百兩の褒美が貰へるなど、番七は話して別れて行く。

奥州逆井村から姉を尋ねて來たおのぶは其處に休んでゐた人に吉原で名高い女郎と唯それだけで

姉を尋ねるが雲を掴む様な尋ねもので知れ様はない。其田舎娘のおのぶを騙まして勘九郎は宗六から五十兩せしめたが忽ち又、五町等の狂言にひつかゝり、さつきの五十兩を捲き上げられた上、地藏に化けたどぢやうに散々になぶられ、とゞの詰りは金にする積りの女郎の證文まで取られる始末  
淺草雷門の盛り場の滑稽な一齣……。

新吉原に今全盛の傾城宮城野の豪奢な部屋。

女郎の宮里、宮柴二人が宮城野の許へ來て、昨日淺草から連れられて來たしのぶの噂。果ては宮城野の慰みにと嫌がるしのぶを無理無體に引立てゝ來たが、遣り手にたしなめられて座敷へ行く。

跡に宮城野、此田舎娘の故郷は奥州、姉が吉原で名高い女郎になつて居ると聞き、遙々尋ねて江戸へ出たと云ふのが氣に懸かり、奥州は何の邊かと聞けば、白石在の逆井村、父さんの名は與茂作と隠さず答えるものだから、驚く宮城野。

然う云ふ宮城野こそ、奥州白石在の百姓與茂作の姉娘で、父が年貢未進のため水牢へ入れられ様とした時、切迫詰つた難儀を救はうとて、憂川竹の流れへ沈めた身なのだから――。

が、妹のしのぶは姉さまなりや證據がある筈、と油斷せぬので、言はれて其れと氣付いた宮城野床に飾つた壺井の守を出して見せる、しのぶも首に掛けた守を見せ、始めて姉妹の名乗をした上、互の嬉しさ、懷しさ、抱き合つて咽び泣く。折しも來かゝつた亭主宗六は様子あり氣な部屋の體を見ると、密と隠れて次の間から窺ふ。

それとも知らぬ宮城野が、妹を引寄せて父母の安否を尋ねると、しのぶは思はず泣伏したが、また氣を勵まして父アは五月田植の時分、代官志賀臺七に討たれて非業の最後、母アは其悲しみが病の因で果敢なくなれたと語る。

宮城野は聞いて胸潰れ、癪をおこして苦んだが妹に介抱されて漸う氣付く。而して、そんな事と

は露知らなかつた父母の最後を歎いたが、また屹と氣を取直すと、父はもと由緒正しい武士、浪人したれど其娘の宮城野、敵臺七の面差を妹に尋ね、江戸にあるてう許婚の夫を尋ねた上、親の敵を討たいで置かうかと、小棲からげて身拵え、奥の騒ぎに紛れて廊を逃出さうと妹を連れて立ちかゝると、宗六が現はれ、様子聞いたは表に出さず、意味あり氣に止めるので、さては始終を知られたかと悟る姉妹、懷劍抜いて斬りかゝるを、宗六は鏡臺の鏡を取つて受止め、假名本の曾我物語、恰度有合ふを譬えに引いて頼もしく語るので、宮城野しのぶも合點がゆき、身にも胸にも餘る有難さと掌を合はせる。

## 文樂座小史（昭和十八年調査）

- 竹本座創立（現今ヨリ二百五十九年以前）  
貞享元年二月（道頓堀西ノ芝居）
- 文樂座發祥（現今ヨリ約百五十年以前）  
天明年間淡路ヨリ植村文樂軒大阪へ來ル
- 第一次稻荷社内時代  
文化八年ヨリ天保十三年ニ至ル
- 西横堀新築地演時代  
天保十四年ヨリ安政三年ニ至ル
- 第二次稻荷社内時代  
安政三年ヨリ明治四年ニ至ル
- 松島千代崎橋時代  
明治五年ヨリ明治十七年ニ至ル
- 御靈神社内時代  
明治十七年ヨリ明治四十二年ニ至ル
- 松竹合名社繼承  
明治四十二年三月植村家ヨリ繼承
- 御靈文樂座焼失  
大正十五年十一月二十九日
- 隨時興行時代  
昭和元年ヨリ昭和四年マデ道頓堀辨天座ヲ始メ其他隨時興行
- 四ツ橋文樂座創立  
昭和四年十二月以來現在ニ至ル

所ざら  
舞慶上使



白ふおし  
揚屋



まふ  
むら

まふ



おあさの  
袖  
⑫

# 御所櫻堀川夜討

辨慶上使の段

辨慶上使の段

切竹本 大隅太夫  
鶴澤清二郎

## 人形役割

|       |       |       |       |      |      |
|-------|-------|-------|-------|------|------|
| 武藏坊辨慶 | 女房おわさ | 腰元しのぶ | 妻花の井  | 侍從太郎 | 卿の君  |
| 吉田玉助  | 桐竹龜松  | 桐竹紋司  | 桐竹紋太郎 | 吉田玉徳 | 吉田玉男 |

元文二年（二三九七）一月竹本座に上場された文耕堂三好松洛の合作になり、全五段ものでこの「辨慶上使」は第三段目に當る。作全體の内容は、梶原景高、土佐坊昌俊の二人が源義經の間罪使となつて上洛する。梶原は義經を陥れて己れの非を蔽はんとする魂膽、土佐坊は是を知つて、義經を庇護せんとする心、かくて二人の入洛によつて、義經主従とこの二人の間に様々の葛藤波瀾を起すと云ふ筋立てで、平家物語、義經記を素材として義經、辨慶、伊勢三郎、靜、土佐坊、等々を點出活躍させ、多くの史實、傳説を織込んだ作者苦心の作である。

## 梗概

ここは侍從太郎の館である。この侍從太郎と云ふのは平朝臣時忠卿の執權職で、妻花の井は時忠の姫君で今は義經公の北の方の卿の君の乳人である。卿の君は義經公の胤を宿して懷胎中なので、

保養を兼ねてこの侍従太郎の館で假居をして居るのである。

丁度、義經は平家を滅して堀川御所に飛ぶ鳥も落す勢ひであつた。義經の兄頼朝は生來疑ひ深い質で、義經が平家方たる時忠卿の娘卿の君と結婚したのが若しや自分に謀叛でも起す下心からではないかと不審を感じその申し開きには卿の君の首を打つて差出せとの難題を云ひかける。そしてこの侍従太郎の館へその首を受取りに武藏坊辨慶を寄越すことになつた。

卿の君は太郎の妻花の井、腰元しのぶや久し振りで訪ねて來たその母親おわさを中に大勢の腰元共と打ち興じてゐた折、辨慶がこの館へ現はれたのである。

そして何か重大な要件でもあるのか、辨慶は太郎夫婦共々奥の間へ――。續いて卿の君、腰元共も。後にはおわさとしのぶが懷かしげに親子相逢ふ歡びに浸つてゐた。

しばらくして、浮かぬ様子の侍従太郎と妻花の井が現はれ、おわさに向ひ今日の辨慶が上使の仔細を語りきかす。辨慶が今日の役目は卿の君の首を打つことであるがそれは忍びない。誰か身代りでもと云ふので考へ付いたは腰元しのぶ、年頃と云ひ器量と云ひ、首打つて頼朝公に卿の君の御首と云つて渡しても疑はれまい、何卒しのぶの命を主の身代りに貰ひ度いと無理な頼み。

然し、おわさはそれを拒絶する。しのぶは主のためだから死ぬといふ。そこでおわさはしのぶを殺す事の出来ない譯があるとて、自分の左の肌を脱いで振袖の片端を出し、十八年以前、頃は夜も長月の廿六夜の月待ちの夜、二八餘りの稚兒姿の知らぬ男と契つた物語をし、「假り寢の情は浅けれど、妹脊の縁や深かりけん……」その月より身も重く、産落したのがこの娘しのぶで、今日まで母親が憂き苦しみも、如何かして知らぬ父に娘を逢はしたくその夜のかたみのこの振袖を便りに父

親を探してゐるとの涙の述懐。

おわさが語り終つて娘を連れて立たうとした時突然障子越しに刀が突き出て娘しのぶの脊中を挟る。皆がアツと驚く途端、奥正面より今日の上使武藏坊辨慶が、黒地に輪寶の模様の大紋を着て、血刀を掲げて悠然と立出る。これはと驚く皆の真中にどつかと座した辨慶は、「是には深い仔細のある事、これ見よ」と我が身の片肌を脱ぐ——とこれは意外、おわさがかたみの振袖と對の模様の紅の大振袖の伊達模様、十八年前におわさが假寝の契を交した稚兒播州書寫山の鬼若丸、おわさが多年尋ねる戀しい夫、しのぶが片時も忘れ兼ねた験の父こそ、この武藏坊辨慶であつた。

辨慶は、しのぶは自分の娘だから主君の身代りにするのだと話す。

おわさは始めて總べてを納得したが、手負のしのぶは委細も知らず現在生みの父親の手に掛つて息絶える。

おわさがしのぶの死骸に取り付いての愁嘆……

流石に辨慶も父として名乗りもせず我が手に愛し娘の命を奪つたことの悲しく、

「生れた時の産聲より外には泣かぬ辨慶が卅餘年の溜涙一度に亂すぞ果しなき……」

と泣きに泣き入る。

やゝあつて時計の音。

辨慶は心を取り直し侍従太郎に娘の首を討つて渡せと云ふ。太郎はしのぶの首を落すと直ぐに自分も切腹し、卿の君の乳人侍従太郎の首を添へて差出せば、よもや贗首とは誰も思ふまいと云つて死ぬ。

辨慶も成程と頷ぎ太郎が首を打ち、二つの首を白布に包んで左と右に抱きかゝへ、

「卿の君の御首、侍従太郎の首諸共、武藏坊確に取つた——」

と呼ばはり、おわさ、花の井の名残りを惜しむを振捨て、堀川御所へ歸へつて行く……。



ずに、もふ歸るげなが。ウンあん人ア孝行もんじやよ、昨日ア野良着きての、畑サ行くんじやつて、今朝また軍服での墓参りの歸りじやつて、村方の人にもよろしふつての中々感心なもんじや。そふじやげ、また、あのおつ母アもがせえもんのヲ。ほんさ、この親にしてこの子有りですがの。そげえなむつかし事ア解らんが、マア何にしても若いもんナ見習ふ事ツじや、イヤイヤ、若いもの事よりや、おらも精サ出して、この親とやらとほめてもろふけ。イヤ／＼權爺どんも、年サいかして、若いもんにも負けずに、村の者ア皆感心しとるけん。エーイおだてるでねえ、ハ、ハ、ハ、ハ、ナラ太市どん、また晩に話そけえ。ン權爺どん、足元サ氣付けて行かつせいよ。ウン、有りがつと。老若若きもなごやかな、道は分かれど一筋に、我家我家へ歸るさの。何れ其時きや白木の箱よ又の逢ふ日を九段坂。其の九ツの御柱と、知る由もなき母親を、連れ立ち行くも終りぞと、心の定二等兵、顔にも出さず秋晴れの、野面にほころぶ稻の穂も、笑顔で渡る可愛川、樂し團樂の一つ道。おつ母さん、よい景色ですなア。さふかのふ、わしやいつも通るげに、そふも思

わんがお前アマアたまに歸つてじやけそふも見えるんじやよ。イヤ、いつも變らぬこの眺めも、今日は別して美しく想ひます。アノ日野山の城跡、可愛川の流れ、子供の時分は、あの城跡まで蜻蛉つりと行つたり、可愛川では石遊びしたり、おつ母さん、随分御苦勞かけましたナア。なにを定、思ひ出した様に、なんけ、しかしのふ定お前も今は日本の海軍さんじやけに、天子さまやお國の爲、立派な務め忘れん様にの、そして又、方々の國々の人さも寄つてじやろふに、お友達にも憎まれん様にのふハイ、おつ母さん、御教訓はしつかりと、決して、決して忘れは致しません。ほんさ、もう會はれんかの様にのハ、ハ、ハ、女はこせつくでのふ、氣んすなよ、病氣さアせんよふにの。ハイ、おつ母さんも御無理をして、お牀をそこなわね様お氣を付けて下さい。ン、おつ母アまだ／＼丈夫じやけに、内の事ア心配せず、御奉公サ大事に、立派な兵隊さんに成つておくれよ、もしかの時人は人様に笑はれん様にの、お父つさんもそれを言ふてじやけ。ハイ、お父さんにもよろしく申し上げて下さい、それから、これはお父つさんに渡して置こふと思ひました

が、弟や妹に菓子でも買つてやつて下さい。お前エ、そんな事せんがえ、お前も何かというげに。イエ、僕はよろしいんです。そんな事。イエ、心配せずにどふか。なにけ。イヤ、ナ、何んでもありません。それではおつ母さん、いつまで送つて頂いてもお名残りが盡きません、これで征きます。そふけ、もつと送つてやりてえがの、夕餉のこしらえも有るげに、ナラこれでいいます、折角の休みに樂もさせいで働かしてばかしすまなかつたのふ。勿體ないおつ母さん、人の子として當然の事であります。それから、これは鎮守さまのお守りじやで、粗末にせん様に體へつけんさい。ハイ、いろ／＼お心づかひ、有難ふございます、それではおつ母さん。氣をつけての。こゝは川迫、向ふは日野山、中を流れる可愛川。見送る瞳、一時雨、野分の風に吹き分かれ消ゆる姿に伏し拜む心ぞ清き眞珠灣。

珠と碎け花と散る今ぞ歸らぬ我心、堅く秘めたる奥底も誰れにか岩佐海軍大尉、頭に頂く諸勇士の盡忠報國秋ぞ今門出を前に九勇士、中に横山海軍中尉、上田二等兵

曹と共々語る夜の空流れて走る星、一つ。上田。ハイ、見たか今のアノ流星を、あの星の飛び行く方こそ我々の征く所だ。岩佐大尉を始め、皆々今回の企圖も今日あるを期したが爲めだ、とふ、其秋が來たのだ。ハイッ、そふです、これ程最大の喜びはありません、先刻も岩佐大尉より訓示を頂きました、萬全を期してやります、何があつても必ずやり抜きます、先程片山二等兵曹が、あくる日のルーズベルトの泣き言を俺も聞いたぞ閻魔の前でとやつて居りました、想ふても痛快です。ウム、皆々苦勞の仕甲斐があつたと言ふものだ、が、想へば永い間苦勞をかけたなア、よく面倒を見てくれた、改めて禮を言ひます。滅相もない、至らぬ自分を、これまでの御訓育、今又この名譽ある壯舉にお伴が叶ひ、上田、この上の喜びはありません。ウム、よく言つてくれた、しかし乍ら君達の家族に對しては、實に氣の毒に思ふて居る。御言葉恐縮に存じます、が、軍人の家族としては如何なる人も、一旦緩急の場合御國に殉ずる事に至高の名譽、これに過ぐるはなく、我日本人である限り誰れしも喜ぶ事と存じます、私も過日歸省の際、両親より言はれまし

た、我子にして我が子でない、大君に捧げまつたお前だから、一朝有事の際は、立派な帝國軍人として人後に落ちず、笑はれぬ様にと、横山中尉、不肖の上田にも親は過ぎたる者でございます、イヤ、コレハ、子として親の自慢話し、どふかお聞き流しを願ひます。イヤ、そふでない、立派な兩親だ、わしにも父には死別したが現在猶母が居る、強い、そして優しい母だ、上田、見へるかこれが母だ、想へば今日まで皇恩の萬分の一にも報ひ奉る事もなく、また二十三年の母の慈悲に對し、十分の孝養も盡しえなんだ、お母さん、今日こそ横山中尉、死所をえて醜の御楯と散り、皇恩の萬分にも報ひ奉りますなればすべてを御寛容願ひます、これが私の孝の始めであり、また終りでもあります、お母さん、どうか御壯健でも心の内在ますが如き寫し繪の母の面に浮く笑顔、孝は忠たり一道の心を想ひ上田もまた、取り出す包み土の香に、父母の情けの重き艦、輕き命の捨て所。上田、何だそれは。ハイ、土であります。何、土。ハイッ、自分は農家に育ち、土は一入なつかしく想ひます、稻垣二等兵曹も今度歸郷の時、祖先の墳墓の土を持つて歸りました

思ひは同じだらふと存じます、この土には、父の情けもあり、母の愛もこもつて居ります、この度の事、何國に於いて散りますとも、この日本の土の香は永しへに、八絃一字の御精神と在りませふ。上田ッ。ハイ。床しい、美しい心だ、それでこそ、帝國軍人だ、その皇德に浴せんこそ、我々の念願だ、萬全を期してぬかりなく。ハイッ、必ずやりとげます、死してもなほ止まざる心です。ウム、互ひに心を清め、皇恩に報ひ奉らふ、今宵、最後の故國の空、別れに望み、皇居に向ひ奉り、聖壽の萬歳を壽ぎまつる、氣をつけッ。

海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍大君の、爲には何ぞ命をや、何惜しからぬ軍人、香りも床し梅の花、一片散るや君に忠、二片散るや父母に孝、散りにし後ぞ結ぶ實の、家門の譽れ過ぐる日の幼姿の偲ぶる、誰が口ずさむか子守唄、ねんねるよ、ねんねるよ、ねんねの子守はどこサ行た、お濕洗ひに里サ行た、里サおどふに何もろた、宮島杓子に貝細工。定、よくやつてくれたのお父つさんも、おつ母もお前の戦死の知らせを聞いた時

きや、どげえ嬉しかつたか、聞きや、この墓の土を持つて行つたそらなげ、其時から戦死の覺悟で居たんじやのふ、今から思へば、弟や妹に土産サ呉れた時、紙包から土がこぼれた様に思ふたが、この土であつたんじやのふよく持つて居てくれたのふ。おつ母ア、目出てえ、定の戦死の奉告じやけ、涙サ、出すなよ。天子さまの御爲じやもん、悲しかねえが、つい、つい、嬉しふての、かんにんして下つせ、定や、何れ靖國サアへ、逢ひに行くけにの。サアモウそろ／＼お天道さまの上がらつしやる頃ぢや、二人で拜んで歸るけ。ハイ。悲し涙は出さねども嬉し涙に明けの鐘、寂滅爲樂とひゞくとも、聞いて驚く人もなし、梅は散りても實はみのる、鳥は古巢へ歸れども。父さん、伴の手植えの梅の木に、あれ驚が。ウム、驚も泣いてくれるか。征きて歸らぬ死出の海、泣くな歎くな必ず歸る、桐の小箱に錦の衣、逢ふは九段の坂の上雲なく晴れて、軍神還らぬ五艇、九勇士の、其名特別攻撃隊、登る旭の御光りに、譽れは世々に輝きぬ、譽れは世々に輝かん。

皇國の興廢  
此一戰に在り

各員

一層奮勵

努力せよ

輝く海軍記念日

# 新<sup>しん</sup>版<sup>ばん</sup>歌<sup>うた</sup>祭<sup>さい</sup>文<sup>もん</sup>

野崎村の段



野崎村の段

|       |       |       |        |        |       |
|-------|-------|-------|--------|--------|-------|
| 親     | 娘     | 娘     | 丁稚     | 母      | 下女    |
| 久作    | お光    | お染    | 久松     | お勝     | およし   |
| 竹本住太夫 | 竹本叶太夫 | 竹本源太夫 | 竹本播路太夫 | 竹本伊勢太夫 | 竹本司太夫 |
| 豊澤新太郎 | 野澤吉三郎 | 豊澤新太郎 | 豊澤新太郎  | 豊澤新太郎  | 豊澤新太郎 |

寛永五年正月（二三六八）のお染久松の情死事件を脚色して歌舞伎に最初上演したのは寛永七年（二三七〇）正月、大阪荻野八重桐座の「心中鬼門角」で、當時歌祭文にも唄はれて大阪市中の評判であつた。この人氣を利用して淨瑠璃に仕組んだのが正徳元年四月（二三七一）豊竹座上演の紀海音作「お染久松袂の白しぼり」で、同系狂言の源となつた。次いで明和四年（二四二七）十二月、大阪北堀江座上演の菅專助作「染模様妹背門松」となり、これらを粉本として安永九年九月（二四四〇）大阪竹本座に近松半二作のこの「新版歌祭文」が上演された。これは座摩社の段、野崎村の段、長町の段、油屋の段の全二巻四段よりなり、殊に野崎村の段が有名である後、文化元年（二四六四）八月、佐川魚麿作「増補新板歌祭文」が出た。

## 梗概

疎々たる枝に、初梅の花咲く村の春景色。

娘 お 桐竹龜松  
娘 お 染 吉田榮三郎  
下女 およし 吉田玉男  
親 久作 桐竹政龜

は親のお蔭。こんな事なら今朝あたり、髪を結ふて置かうもの、鐵漿の付けやう挨拶も、どう云ふて能かるやら……と揉手やら、辭儀の眞似やら落着かず、勝手から俎板や庖丁を持出して、祝言の用意の膾大根をちよき／＼と刻み出した。

丁稚久松 桐竹紋太郎  
母 お勝 吉田多三郎  
船頭竹松 吉田兵次

と、久松の跡を慕ふて堤傳ひ、下女およしを連れて來た油屋の娘お染が、船の上り場で教へられた梅を目當てに久作の家を探し當て、下女を戻すと立寄る門口、今日大阪から久松と云ふ人が戻つて見えた筈、ちよつと逢はせて下さんせ……と言ふ。

其の聲聞くと、思ひ當る節のあるお光、組板押し遣り、昵々と戸外を覗いて悋氣の初物、最うもや／＼と胸は搔き亂れ、何ぢや、久松さんに逢はせて呉れ、そんなお方はこちや知らぬ、と、膠もない腹立ち聲。

其様子がお染は腑に落ちず、ふと思ひ付いて、土産代りに伏紗包みの香箱を差出すと、こりや何ぢやえ、大所の御寮人様、様々と云はれても、心が至らぬ措かしやんせ、在所の女子と侮つてか欲しくばお前に遣るわいなあと、香箱投げ付け、門びつしやり。

其處へ久松連れて出る久作、久松に肩を揉ませお光には灸を點えさせるが、お染の門に居るのを氣付いた久松の、折が悪いと目顔で止めるのが、お光には又妬ましくて諍ひを初め、夢中になつた

揚句は、久作の頭へ灸を點える始末、其れを久作が仲裁して、仲直しが直ぐに取結びの盃、髪も結ふたり、鐵漿も付けたり、湯も使ふて花嫁御、作つて置けと打笑ひ、お光を連れて納戸へ入る。

其間遅しとお染は駈入り、山家屋へ嫁入せいは胴慾ぢや、其方は思切る氣でも、わしや何ぼでも得切られぬ、と久松が殘して來た文を突付け、搔口説き、用意の剃刀で自害しやうとするので、久松も所詮は深い惡縁と思ひ、お染の手を執つて泣き悲しむ。

始終を立聽いた久作が出て、久松は實の子で無く、二本差す家柄に生れたのを、妹が乳母で有つた關係から引取つて養つた事から、智慧付けの爲に油屋へ丁稚奉公に出した事を語り、親方の恩も義理も辨へず、嫁入の極まつたお主の娘を唆かす

久松を責め、又、お夏清十郎の昔語りに擬え、二人の不心得を懇ろに誠め、理を盡して別れる様に合點させると、只聞き入れたとの返辭を喜んで、お光を呼出し、祝言させよと綿帽子を脱れば、島田髻が根元から切つてあつた。

事の意外に皆なが驚くのをお光は押えて、お二人が思ひ切つたと云ふは表向、底の心はお二人ながら、死ぬる覺悟と知た故、何うぞお命取止めたさ、わしや最うと思ひ切つた。さあ、切つて祝うた髮容……と兩肌脱げば、下着は白無垢、首には五條袈裟をかけて居る。

玉より清き貞心に、今更ら何と言葉さへ、久松お染が面目なさに、自害しやうとするを久作は止め、蝶よ花よと樂んだ、一人娘を尼にして、出來したと云ふ心の中、思ひやりが有るなれば、何故

存らへては下さらぬ……と、二人を諫めて合點させ、嘸ぞ母御様が案じてござろう、大事な娘御誰か確な者に送らせ度いものぢやと、久作が案ずる折、油屋の後家お勝が入つて來た。

様子を殘らず表で立聽き、久作の親切、お光の志しを心で拜んで居たお勝は、二人に禮を述べ、世上の補ひ、心の遠慮から、駕で堤を大阪へ戻る久松とは別れ／＼に、お染を連れて、船で戻る事にする。

【夜の部】

紫紅山人原作  
鶴澤重造作曲

新曲 紅葉狩

(床本) 新曲 紅葉狩



更科姫 竹本伊達太夫  
實ハ惡鬼 竹本濱太夫  
平維茂 竹本濱太夫  
山神 竹本文源太夫  
こし元 竹本津磨太夫  
こし元 竹本宮太夫

信濃路に名高き山や戸隠しの時雨に色も染め上げし錦  
いろどる夕紅葉影も永月治まれる御代は平の維茂が供を  
も連れず唯一人矢竹心の梓弓入野の草の露分けて行方も  
遠き山陰の嶮しき道を辿り來て、ア草木心なしと雖も春  
は花咲き秋は梢を染める山紅葉色とりどりの唐錦紅の一  
葉は烏帽子の上黄金の色は袖袂すれつからみつ散りかゝ  
る落葉の色に飽きもせで歸る家路を忘れじと暫しイみ居  
たりけり、テ心得ぬかゝる深山路殊に日も早や傾きしに  
何所の誰が手づさみかいたも床しき琴の音の主は如何な  
る人ならむ。審しさよと見廻す彼方紅葉の木の間幔幕  
の張りしは高位の方なるべし、與妨げんも不躰けと道を

|   |   |   |    |   |   |    |  |
|---|---|---|----|---|---|----|--|
| 琴 | 琴 |   |    |   |   |    |  |
| 野 | 豐 | 鶴 | 鶴竹 | 野 | 鶴 | 野  |  |
| 澤 | 澤 | 澤 | 澤澤 | 澤 | 澤 | 澤  |  |
| 錦 | 仙 | 德 | 清團 | 八 | 友 | 喜  |  |
|   | 三 |   |    |   | 衛 | 左衛 |  |
| 糸 | 郎 | 若 | 廣作 | 造 | 門 | 門  |  |

隔てて過ぎ給ふ、ナウ／＼客人暫くと聲打ちかけに更科姫、幕より出づる、白菊の香り氣高きなりかたち、こなたは思はず振り返り待てとお止めなされしはやんどとなき御方なるか問はれて姫は手をつかへ、思ひも寄らぬ深山路に女計りの紅葉狩、無酔狂とも思し召さふが此の戸隠しのもみぢ葉の錦と紛ふ此景色、獨り樂しむ本意なさあなた様にも御一緒に御覽じなされ下さつたら有難う存じますと言葉やさしき女郎花、露に色香やこぼるらん、ア、イヤ折角の仰せなれど男女七歳にして座を共にせずとの世のたとへ、御縁もあらば又重ねてと行かんとするを引き止め、アモウシ、時雨に急ぎ給ふより一樹の影に立寄り共に樂しむ菊の酒、滯れて色ますもみぢ葉の淺き契りを末迄も遂げたさ故の我思ひ見捨て給はで諸共に深き山路に鹿ぞ啼く妻戀ふ聲の身に染みて一層思ひは増鏡曇らぬ内を今暫し休らひ給へと夕映への紅葉恥らふ其風情岩木ならねば維茂も心動きてたゆたいつ日も黄昏に近づきて歸館に心急げども見渡す山の夕紅葉又一入の風景に暫し名残りを惜まんと仰せにいざや腰元が案内に姫も

引添ふて連れ立つ足はいそいと散り布く落葉菊の花秋  
 海棠の色深き道踏み分けて維茂が猛き心の置く霜と共に  
 まどひの苔庭胸も燃へ立つ毛氈に運ぶ盃銚子酒、心嬉し  
 き玉簪人の情の盃も數重なりてうつとりといつか隔ても  
 中垣に並々ならぬ此名酒思はず銘酎致せしと又もさゝる  
 盃を手に取り上げて打ほゝゑみ此大盃を否みもせて波と  
 受けたる維茂にさかな所望と仰せある、腰元共は口々に  
 オ、それゝ其おさかなにはお姫様日頃のお稽古おさら  
 へに一さしお舞ひ遊ばせと勸むる詞姫君は、拙きわざも  
 殿御への心のたけを萬分一おはもじながらと立上り敷島  
 の三つの景色と歌人が霞と共に杖を引く一ト目千もとの  
 三吉野や花の盛りによそへてし越路の雪の降りつみて見  
 渡す限り白妙の木曾山越へて更科の木々の梢も紅葉して  
 山を望めば山姫の手織なせる唐錦柞の森や木の蔭の小倉  
 の山の風景は外に類ひも嵐山流れの元はいづく共誰白菊  
 の咲き亂れ汲みて香を知るくすり水さす手引く手もいつ  
 しかに夢ばし覺まし給ふなと云ひ捨て奥へ入相の夢かう  
 つゝか維茂が酒の嬉げんにうとゝと結ぶも早き秋の暮

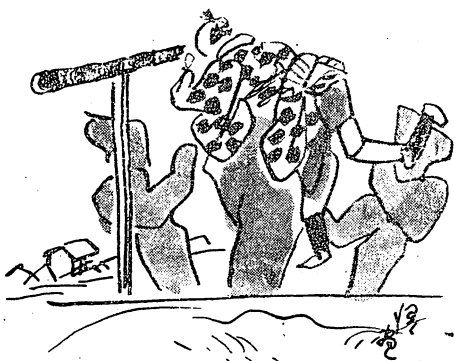
夜嵐寒き山蔭に現はれ給ふ神童の白衣のみ姿おごそかに  
 如何に維茂汝無明の酒に酔ひ臥し、此所にある事危ふし  
 〳〵一時も早く疾く起きよ我は八幡大神の命に依り假に  
 姿を現わして弓矢の道を護るなり、疾く〳〵目覺め立ち  
 去れと持たる杖をつき鳴らし〳〵吹く風と諸共に掻き消  
 す如く失せ給ふ、夜風身に染む維茂がムツクと起きて四  
 邊を見廻しアラ淺ましや〳〵我無明の酒に魂を奪われま  
 どろむ中に神夢の告げ扱は今まで姫なりと思ひ詰めしは  
 正しく鬼神、イデ本體を見届けて世の災ひを絶ち呉れん  
 と突立ち上る折しもあれいと物凄き山嵐風にヒラ〳〵も  
 みぢ葉の影にスツクと異形の姿さてこそ惡鬼でありしよ  
 な、オ、サ女と化して汝等の命を奪ひ先つ頃大内山に栢  
 果てし我眷屬の鬱憤を晴らさんものと思ひしにエ、口惜  
 しや、汝が所持する名劍の威徳に通力破れたり、イデ此  
 上は汝をば我隠れ家へ連れ行かんと襲ひかゝるを事とも  
 せずきらめく雷維茂が武勇勝れし太刀捌き惡鬼は炎を放  
 ちつゝ秘術を盡す有様に紅葉は火の子と飛びちがふ咸陽  
 宮の烟りの中刃鋭く無二無三切りかけ切り伏せ維茂が忽  
 ち鬼神を滅ぼせし劍の威徳ぞ。

新

關

の

段



奴助平竹 七五三太夫  
 娘 お袖 本本太夫  
 和田志津馬 竹本源太夫  
 鶴澤 豊竹 文つばめ太夫  
 綱 造

伊賀越道中双六

新關の段  
 竹藪の段  
 岡崎の段

天明三年（二四四三）四月竹本座初演。作者は近松半二、近松加作。忠臣藏、曾我兄弟と共に日本三大敵討の一つ、荒木又右衛門の伊賀越の敵討を骨子としたもので近松東南作「伊賀越乗掛合羽」（安永六年三月二四三七）豊竹此吉座上演の改作で、全曲は第一鶴が岡の段第二行家屋敷の段、第三圓覺寺の段、第四郡山宮居の段第五郡山屋敷の段、第六沼津の段、第七關所の段、第八岡崎の段、第九伏見の段、第十敵討の段の十段からなつてゐる。この中、第五、第六と共にこの第八岡崎の段が有名である。

梗概

茲は往さ來るさの旅人繁き、東海道の藤川宿、

新たに設けられた關所の門前である。

眺めよき一軒の茶店——それを預るは關の役人  
山田幸兵衛の娘お袖とて、年も出花の美しさに、  
店は仲々繁盛する。今も床几に憩ふ若い浪人、即  
ち父の敵澤井股五郎を探ねる和田志津馬は何かと  
お袖に道の事などを問ふてゐたが、どうやらお袖  
の素振りが只事ではない。そこで、綺麗な若衆志  
津馬は、暫し思案の後お袖に向ひ、今宵此關を越  
さねばならぬ身だが、相憎と肝心の切手を持たぬ  
どうか其方の才覚で拔道あらば教へてはたもらぬ  
かと持掛けた。お袖は、愛しと思つた男の頼み、  
直ぐと承知して、暮六ツには關所の門が閉る故、  
其後で私が御案内をと約束する。折柄又新しい客  
が來た。これは鎌倉の飛脚助平が、未だ八つには  
間があらうと床几にかけ、お袖の容貌に見惚れて  
手を出したりする。それを煩くふり放つたお袖は  
傍の遠眼鏡を指さして、吉田の女郎衆など覗かん  
せと突きやつた。

人形役割

鶴澤友三 鶴澤友三 鶴澤友三 鶴澤友三  
野澤八三 野澤八三 野澤八三 野澤八三  
豊澤仙三 豊澤仙三 豊澤仙三 豊澤仙三

娘 和田志津馬 吉田榮三 吉田榮三 吉田榮三 吉田榮三  
和 田志津馬 吉田榮三 吉田榮三 吉田榮三 吉田榮三  
奴 田志津馬 吉田榮三 吉田榮三 吉田榮三 吉田榮三  
櫻 田志津馬 吉田榮三 吉田榮三 吉田榮三 吉田榮三  
蛇 田志津馬 吉田榮三 吉田榮三 吉田榮三 吉田榮三  
唐 田志津馬 吉田榮三 吉田榮三 吉田榮三 吉田榮三  
竹 田志津馬 吉田榮三 吉田榮三 吉田榮三 吉田榮三

人形役割

豊竹松島太夫 豊竹松島太夫 豊竹松島太夫 豊竹松島太夫  
鶴澤友三 鶴澤友三 鶴澤友三 鶴澤友三  
豊澤仙三 豊澤仙三 豊澤仙三 豊澤仙三

唐 木政右衛門 吉田榮三 吉田榮三 吉田榮三 吉田榮三  
取 木政右衛門 吉田榮三 吉田榮三 吉田榮三 吉田榮三

岡崎の段

人形役割割

|         |       |       |         |        |      |       |       |       |     |
|---------|-------|-------|---------|--------|------|-------|-------|-------|-----|
| 幸兵衛女房   | 娘お袖   | 和田志津馬 | 蛇の目眼八   | 唐木政右衛門 | 捕手小頭 | 山田幸兵衛 | 女房お谷  | 夜廻り   | 取巻  |
| 吉田多三郎   | 吉田榮三郎 | 吉田光造  | 吉田玉徳    | 吉田榮三   | 吉田藤一 | 桐竹門造  | 吉田文五郎 | 桐竹紋太郎 | 大ぜい |
| 中竹本隅若太夫 | 次野澤錦糸 | 豊澤呂太夫 | 切豊澤古靱太夫 | 鶴澤清六   |      |       |       |       |     |

ひよろ／＼と突かれた助平、遠眼鏡に取付き、種々の笑可味あつて、とど遙かな吉田、其所の青樓の二階に眼を付け、やア彼の女は己の相手、外の男とあれ彼のように睦じさうな小酒盛、おのれ澤井股五郎の家來澤井助平の顔によくも泥を塗つたなど立騒ぐ。フトこれを耳にしたのは志津馬であつた。さてこそと助平の氣付かぬ中に、狀箱から密書を奪ひ出し、尙も助平の腰なる關所切手まで手に入れて了つた。

聽て七ツの拍子木の音に、驚いた助平は關所に入らうとして切手のないのに悔りし、扱は後の立場へ忘れたかと、逸散に取つて返した。

志津馬は難なく關の内へ、店を仕舞つて歸るお袖と共に――。いつの間にやら雪が降つて來た。後へ來たのが櫻田林左衛門、股五郎の附人だが、當の股五郎を女乗物に隠し、蛇の目の眼八と連立ちながら、澤井氏を敵と覗ふ唐木政右衛門、和田志津馬の兩人、若し此宿を通らば其方の手で仕止めてくれと頼み、聽て關をば越して行つた。

伊賀越道や双六

目崎のどん

此処櫓下

曲豆竹市販太夫

相勤申作



暮六ツの鐘が鳴つて、關所の門も淋しく閉つた其所へ走せ來つたのが唐木政右衛門。今の行列こそ確に敵、此關を越さねば行方を失ふと思ひ惱んだが、とど門の傍に生茂る竹藪へ分け入つた。裏道づたひに關を越さうと云ふのだ。助平も急ぎ歸つて來たが、矢張切手が無い爲同じ様に竹藪へ分け入つた。竹藪の中では、關所破りがあると云ふので、役人達はソレッと探しにかかつたが、政右衛門は巧みに逃れ、助平が捕はれて了ふ。

岡崎も此所は宿はづれ、山田幸兵衛の住居である。先刻娘お袖が案内して戻つた若侍こそ、櫻田林左衛門から頼まれた武士の年格好なり、尙も探らんと眼八はそつと裏手から廻つて、其所に在つた長持の中へ身を忍ばせた。

藤川の新關を破つてやつと此所迄抜けて來た政右衛門は、後より追手のかかる氣配に早速の氣轉兩刀を雪中に埋めて丸腰の姿となつた。そして關破りでは無いと云譯しながらも、打掛る捕手相手に止むなく無手であしらふ。政右衛門が多勢を相

手の手練を、早ほの暗い雪明りに、老の眼凝らし見てゐたのは主幸兵衛、やをら門口へ姿を現はし、之は吾らが知人、決して武士ではない。關破りと間違へて此間に眞の關破りを逃してはと、役人を引取らせた。そして強つてと政右衛門を内へ招じ入れ、さるにても身共と同じ眞景流の極意の手の内と、行燈かき立て見合す顔。と、二人は元の弟子師匠であつた。二人の歡喜——。

政右衛門は尋ねられるままに、が、敵を尋ねる身の油斷なく、只今は浪々の身の上とのみ、好い程の事を云ふてゐる處へ幸兵衛の女房もいそ／＼と出て來て、連合の眼鏡に違はぬ武藝の上達、其器量を見込んで頼みたきはと、幸兵衛共々娘お袖が聳たる可き股五郎を敵と覗ふ和田志津馬、殊には助太刀の其姉嬢唐木政右衛門と云へるが武藝の達人、これが怖い故聳の助太刀を頼む／＼と云ふので、驚いたのは當の政右衛門である。併し早く知りたいは股五郎が在所と、急き立つ折柄、長持の中の眼八がソツと覗いた。それを幸兵衛が氣づいて話をそらす。其所へあるきの小助が、庄屋

方から急用なりとて幸兵衛を迎へに來た。後に老婆は糸つむぎ、政右衛門も亦師匠に仕へる忠實しさ、傍に干してあつた煙草の葉を切つてゐた。

雪はしん／＼として降つてゐる。其寒く淋しい夜道をば、政右衛門が國に残せし女房お谷は、夫や弟が敵を探す辛苦を思つてはぢつとしてゐられず、又一ツには嬰兒の顔も見せたく、順禮姿の道中を、遙々さまよひ來る中、持病の癪にせめられて偶然にも此家の門口に打倒れた。其物音に何氣なく外を覗いた政右衛門は吃驚いた。包む我名の露れ口、ああ折悪い處へと、獨り氣をもむとは知らぬ老婆の親切、助けてやらうと云ふのを無理に止めて、自分も紛らす煙草切り。老婆が唄ふ鄙俚の憫れささへ、門には心細氣な女房の述懐、果はお谷は其儘そこに氣を失つて了つた様子、政右衛門が心中の四苦八苦、でも尙も反對するので老婆は止むなく嬰兒だけを抱入れて奥の間へ——

其隙に政右衛門は四邊に氣を配りつつ、妻を思ひの焚火してソツとお谷を呼生かす。お谷の嬉しさ、悲しさはどうあらう。それに多くも云はせぬ政右衛門の苦哀、それとて今宵ただ今敵に出會う

大切な瀬戸、其方が居ては事の破れ、這つてなりと姿を隠せ、嬰兒はしかと預つた。をゝ其顔もよく見たと嚙んで含める様に慰め勵まして外へやるかやらぬに主の幸兵衛も歸つて來た。そして股五郎に引會せ様と云ふ時、奥から走り出た老婆は嬰兒を夫に見せながら其巾着に唐木政右衛門の一子と記してあつたと云ふので幸兵衛も之は好き人質と喜んだ。それを矢庭に奪ひ取つた政右衛門、何思つたか嬰兒を刺し殺し、これはと驚く幸兵衛に向つて、我これに在らば、政右衛門と云へる奴討つに何の手間ひま、今此な倅を刺殺せしは門出の血祭と、勇むも悲しい心中の中、それをば幸兵衛も曲者、何氣なく勇氣の程を褒め、老婆を奥へ立たせて其股五郎を呼ばせると、互ひに見合ふて吃驚、それも其筈股五郎と云ふのは實は志津馬であつた。呆れる二人を満足氣に見やつた幸兵衛。我が心中を打ち明けて、殊には政右衛門が我子を殺して敵を計る武士道を賞し、髻股五郎の肩持つ意地もこれ限り、變らぬものは子の可愛さと嬰兒の骸を佛間へ送り、掬眞の股五郎とは床屋方にて會ひ、藥師堂を山越しに落しやつた事を語り、眼八を斬つて捨てて二人を勵まし發たせてやつた。

堀川猿廻しの段



おしゅん ちかごろ か・はら たてひき  
傳兵衛 近頃河原の達引

堀川猿廻しの段

|     |      |       |      |
|-----|------|-------|------|
| 兄   | 與次郎  | 竹本    | 相生太夫 |
| 娘   | おしゅん | 竹本    | 南部太夫 |
| 傳兵衛 | 豊竹   | つばめ太夫 |      |
| 弟子  | おつる  | 豊竹    | 呂賀太夫 |
| 親   | 豊竹   | 呂太夫   |      |
| 鶴澤  | 鶴澤   | 觀西翁   |      |
| ツレ  | 鶴澤   | 寛治郎   |      |

「それや聞えませぬ傳兵衛さん」で有名なこの淨瑠璃は、その實、作られた時も、作者も未だ詳でない。天明五年五月五日（二四四五）から江戸の肥前座で上演された時の正本に作者として爲川宗輔、筒井半二、奈河七五三助があげられてゐるのは恐らく既作品に少々筆を加へたものであつて、この事はこれより先き天明二年には江戸外記座で八重太夫が堀川の段を語り、天明三年には大阪北堀江座で、同じく八重太夫が堀川を語つたと云ふ記録が残つてゐる事から推して考へられる。とも角、本曲は上中下三卷六段からなり、堀川の段はその中之卷に當る。そしてこの全曲は新作と呼ぶに憚る様な成立過程をもつてゐる。即ち本曲より以前に作られた有名な二つの淨瑠璃——明和元年五月（二四二四）竹本座上場、「京羽二重娘氣質」近松半二、竹本三郎兵衛作、並びに、明和五年十二月、北堀江座上場、「紙子仕立兩面鑑」、菅

## 人 形 役 割

|        |       |
|--------|-------|
| 與次郎の母  | 桐竹政龜  |
| 弟子おつる  | 桐竹紋司  |
| 兄 與次郎  | 吉田玉助  |
| 娘 おしゆん | 桐竹紋十郎 |
| 井筒屋傳兵衛 | 桐竹龜松  |

専助作——から大たいの構造、詞章まで借用して寄木細工式につくりあげられた作品である。

更にその素材となつた實説も正確には分らない。たゞ普通よく説かれてゐるのは元文三年（二三九八）中に京都で起つた二つの事件、即ち吳服屋井筒屋傳兵衛と先斗町近江屋の抱へお俊の聖護院の森の情死事件（十一月十六日）、四條河原に於ける公卿侍と所司代の下部との刃傷沙汰（十一月十三日）、堀川に住む猿廻し丹波屋佐吉が孝子として表彰された事（九月廿七日）を取入れて脚色したと云ふ説が廣く行はれてゐる。

## 梗 概

おしゆんの母は京の堀川邊に住居して琴三味線を教へ、長男の與次郎は猿廻しとなつて貧しう暮してゐる。師走の十五日、教へ兒のおつるが習ひに來たので、鳥邊山の唄の三味線を教へて歸す。日暮前に與次郎は小風呂敷を持ち猿を肩に載せて戻り、盲目の母をいたはつて慰めた。母は「廓の主人が娘を連れて來て、おしゆんと戀仲の傳兵衛

が人殺しをした爲、おしゆんを内に置き難く、どうぞ傳兵衛に逢はせぬやうに匿まつてくれと言うて歸つた」と、語つて嘆いた。

與次郎は往來の人に聞かれぬやうに門口を鎖しおしゆんを呼んで母と共に懇に諭し、傳兵衛との縁切り狀を書かせたが、母は盲目、兄は無筆であるから、何を書いたか知らぬども、おしゆんが氣休めの言葉に安心して三人共に寢所へ入つた。

夜更けて傳兵衛は、おしゆんを尋ねて來て戸を叩いた。寢ないでゐたおしゆんは飛び出て「傳兵衛様よう逢ひに來て下さつた」と、言ひながら戸を明けた音に、母も兄も目を覺す。臆病者の兄はあわてゝ暗紛れに取違へて、おしゆんを締出し傳兵衛を内に入れ、燈火を點して見れば傳兵衛であるのに驚き、おしゆんの縁切り狀を突付けた。傳兵衛は怨しげに之を受取つて讀めば、女を守るべき道を説き、傳兵衛と共に死ぬ覺悟を述べ、どうぞ不孝の罪をお赦し下されと、こまごまと記した

書置である。三人ともはつとたまげ、「さてはさうした心であつたか」と、與次郎は急いで娘を引入れる。

傳兵衛は「わしをさうまで思うてくれるか忝いお前はお二人の爲に生き長らへて、我が死後の弔を頼む」と泣けば、おしゆんは「そりや聞えませぬ傳兵衛様」と、女を守る道を語つて自殺しようとする。母も與次郎も之を押止め、娘の貞心に感じて傳兵衛に任せ「二人共に逃げられるだけは逃げて、死なずにゐてくれ」と別れを悲しむ。

與次郎は傳兵衛に編笠を與へて姿を變へさせ、門出の祝として酒を酌み交し、猿廻しの唄を歌うて猿を舞はし、互に此の世の見納めと名残りを惜しむ。かくておしゆん、傳兵衛は母と兄とに見送られ、聖護院の森をさして出でて行く。

觀賞おぼえ

昭和十八年五月

日

碁太平記白石噺

御所櫻堀川夜討

水漬く屍

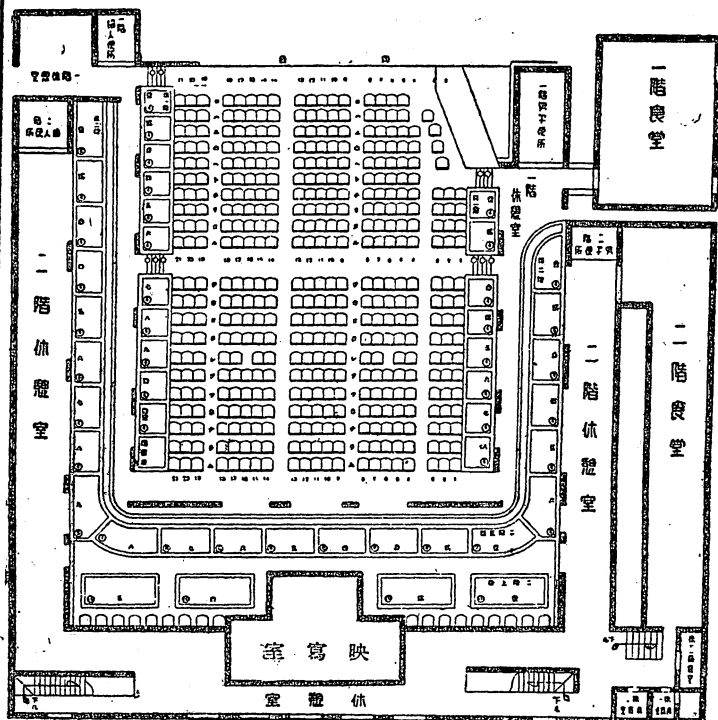
新版歌祭文

紅葉狩

伊賀越道中双六

近頃河原の達引

# 文樂座御席場案内



御覧席は大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出来、またお出入が御自由です。

前賣切符・壹等席のお切符は五日前から發賣致します。

また五日以後のお切符も壹等席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます。御用命の節お呼出しの電話は

南四七壹番で御座ります。

切符賣場・右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて取扱して居ります。

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

京阪神松竹系各座五月興行お知らせ

大阪歌舞伎座  
八二八二 戎電

五月興行大歌舞伎

毎日 晝正午 二部開演  
夜晝五時

櫻 一部観劇料  
一 二 三 等 席 席 席 席  
（税別）  
一〇〇 〇〇 〇〇 〇〇  
二 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇  
四 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

大阪中座  
九七二一 南電

松竹家庭劇

毎日 晝正午 二部開演  
夜晝四時半

観劇料  
一 二 三 四 等 席 席 席 席  
（税別）  
一〇〇 〇〇 〇〇 〇〇  
二 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇  
三 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

大阪辨天座  
八七二 南電

不二洋子一座

毎日 正午より二部開演  
日曜・祭日・十時開演

観劇料  
平場椅子席  
一等席  
（税別）  
一三〇  
六九

大阪角座  
〇一二二 南電

厚關東 西京 歌舞伎 大合同

毎日 晝正午 二部開演  
夜晝五時

一部観劇料  
一 二 三 四 等 席 席 席 席  
（税別）  
一〇〇 〇〇 〇〇 〇〇  
二 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇  
三 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

大阪浪花座  
九五四一 南電

新興演藝特輯番組

毎日 正午より二部開演  
日曜・祭日・十時開演

観劇料  
階下席 九三  
階上席 一六八  
（税別）

大阪しあべ劇場  
五八九三 戎電

一番安い笑ひの劇場

毎日 正午より二部開演  
日曜・祭日・十時開演

観劇料  
階下席 五四  
階上席 九三  
（税別）

大阪大劇  
一三二 戎電

五日まで 春のおどり  
六日より 朝鮮楽劇團

同時上映映畫は  
一週 シンガポール  
二週 あさきり軍歌  
三週 むすめ  
四週 二刀流開眼

都京南座  
五五一 國祇電

當る五月興行 東西合同大歌舞伎

毎日 晝正午 二部開演  
夜晝五時

一部観劇料  
一 二 三 四 五 等 席 席 席 席 席  
（税別）  
一〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇  
二 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇  
三 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇 〇〇

# 開演毎に一方ならぬ御後援御來觀を賜り厚く御禮申上ます

## 當文樂座は

既に皆様御承知の通り我大阪に於ける郷土藝術、三位一體の人形淨瑠璃の日本唯一の公演場でゐるます。

## 文樂座人形淨瑠璃は

雪に大阪の誇りとする舞臺藝術のみならず我

日本に於ける古典舞臺藝術の至寶として世界に誇るべきものであります。従つて開場毎にこの大使命が全う出来ますやう、皆様の御期待に背かぬ様、皆様に御満足して頂けるやうと一同不斷の努力を致して居りますが尙御す氣付きの點は御客様の御聲として承りたく存じます。

## 御携帶品は

正面一階に御預り所が御座ります。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひ致します。お歸りは混雜致しますからお服物は成べく終演一幕前に御受取願ひます。

## 貴重品は

各自にお持ち下さい。お席席お立ちのときは御携帶願ひます

## お煙草は

一階、二階廊下に喫煙臺を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します。お席では御遠慮下さい。

## お食事は

西側別館の階上、階下到大食堂と喫茶室が御座ります。

## 賣店は

二階東側と一階西側休憩所に御座ります。

## お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座ります。

## 場内にて

寫眞撮影は絕對にお斷り致します。

## 御休憩の間は

一階西側に給茶處と大休憩所の設備が御座ります。

お出口は 下足札赤札は正面西本家人口でお渡し致します。黒札は正面

入口東側でお渡し致します。

## 案内人は

胸に番號人マークを附けて居りますから御用の節は御申附け下さい。其他一般従業員に不行届の點は御遠慮なく御注意の程お願ひいたします。

## 出演者

病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから豫め御諒承願ひます。

## ◇皆様へ御案内◇

當座は此度皆様へのあらゆるサービス機關として案内部を特設いたしました。

人形淨瑠璃についての御質問・各種團體御觀賞會・又は諸種の御會合席上へ出張公演等御相談に應じ、よろづ御案内申上ける事に致しました。御一報次第登上、どうぞ御利用下さいませ。

專用電話南 〇三七八八番

松竹株式會社

文樂座

支配人 下村清次郎

昭和十八年四月廿八日印刷  
昭和十八年五月一日發行

大阪市東區久左衛門町八番地  
發行所 松竹株式會社 大阪支店

大阪市東區久左衛門町八番地  
松竹株式會社 大阪支店內  
發行所 鳥江

鏡也

一 部  
金 二十 錢

